



『トクシマ・アンツアイガー』

第5号

徳島 1915年5月2日

イタリア！

くり返しロイター通信は、イタリアが三国協定の側から参戦するのではと伝えている。

イタリアが実際に参戦するのかどうかというような政治論議をするのは、われわれの課題ではない。なぜならここで厳密な状況判断をして一石を投ずるには、あまりに遠い所にいるからである。もちろんロイター通信は、こうした戦争の出来事についてこのような誤った情報をたくさん世界に流してきたので、そうした報道をあまり深刻にとらえる必要はない。おそらくこれまで同様、イタリアは中立を続けると考えてもよいのだろう。

今「イタリア」という言葉を耳にすると誰もが思いつくような政治的な事柄ではなく、イタリア王国の歴史的な形成過程の簡単な叙述をしてみたい。

現在の形のイタリアは、まだ比較的新しい。紀元後5世紀にゲルマン諸族が進入してローマ世界帝国が解体してから、現在のイタリアの地で次々と国家が作られた。

中世、わけてもホーエンシュタウフェン家の統治下では、多かれ少なかれイタリアの大部分はドイツに所属していた。しばらくはヴェネチア、ジェノヴァなどイタリア都市共和国が、かなりの権力を持つようになった。その後さらに、シチリア、ナポリ、サヴォイ、サルディニア、トスカーナなどのたくさんの小君主国が成立することになる。

ローマ周辺は、教皇が世界的な首長でもあった一つの国家、いわゆる教会国家に進展した。

もちろん民族大移動と中世の戦争時代の政治的変革につれて住民も根本的に変化し、わけても北イタリアではゲルマン的要素が強まってくるが、全体としてはロマン系のイタリア住民が増大した。

前世紀の中頃はサヴォイ家が統一思想の本来の担い手で、この家系は現在のイタリアでも支配者を出している。

1859年ナポレオンのフランスがオーストリアに勝ったことで、ロンバルディアがイタリアのものになった。フランス自身は貢献の報酬として、まさにそこからイタリアの統一への努力が出発したサヴォイの一部を手に入れた。

1861年には、ヴィットリオ・エマヌエレ2世がイタリア国王になった。1866年にヴェネツィアの所有をめぐるオーストリアと戦い、もちろんイタリアは敗れたが、プロイセンがオーストリアに勝利したため、ヴェネチア地域全体がイタリアのものになった。

1870～71年の普仏戦争でドイツは、教会国家の存続を保証しローマに守備軍を置いていたフランスを打ち負かしたが、参戦したイタリアはそれを教会国家を王国に組み入れることに利用した。その結果イタリアは、今日の版図を手にするようになった。

この国は、ほぼ3,400万のイタリア人が住む29万6,000平方キロメー

トルの土地のおよそ大部分を含んでいる。

イタリア王国には所属していなかったが今日では次の地域が、大部分イタリアの住民となっている。それらは、コルシカ島、フランスから割譲された部分のサヴォイ、スイスのイタリア州、オーストリア・チロルの南端、イストリアの小部分、ダルマチア海岸のいくつかの地点である。

日本の歴史（４）

他の同族集団でもそうだが邪魔になった蘇我氏の権力を排除するために、王位継承者に選ばれた聖徳太子は西暦 604 年にある法令つまり「十七条の憲法」によって国家生活を新たにきちんと整理し直し、ことに天皇のために国全体に及ぶ絶対支配を達成しようと試みた。

けれども、この憲法は何の役にも立たずたんなる試みに止まった。蘇我氏はさらに次々と特権をわがものにし、以前は同じような権力を持っていたすべての他の一族をしのぐような地位を占めるようになり、しだいに天皇家そのものにとっても危険なまてになった。蘇我家の最後の宰相入鹿は、天皇の息子たちは自分自身の権力伸張の妨げとなると思ったので、彼らを力づくで排除させた。そのうえ入鹿は、自分と蘇我氏に向けられた反逆にはじかに攻撃を加えた。皇室の仲間は今や、どんな危険が迫っているのかを悟った。彼らは、他の蘇我氏の敵と手を結んだ。

中大兄王子が反逆の先頭に立った。入鹿は朝鮮使節の謁見の際に女帝（皇極天皇）の面前で殺され、その父蝦夷はみずから邸に火を放った（645 年）。

入鹿が失脚したことで彼の公職が永久に無くなったばかりでなく、さまざまな外国からの影響で統制がとれなくなった同族国家はいっそう不安定になった。反乱者の側は、今後ふたたび一つの家族だけが権力を持ちすぎないように予防するようになり、国政改革に努めた。彼らは、当時唐王朝

の下で官僚国家を謳歌していた中国の国家整備を手本にした。こうして今や、いわゆる大化（つまり大改革）の改新が起こる。一連の天皇の法令があらゆる生活状況、ことにもっとも有力な階層の生活状況をすっかり変えてしまった。『日本紀』が伝えているもっとも重要な指令は 645 年から 649 年のものだが、その後 50 年間はさらに大きな変革につながる一連の革新が行われた。

もっとも大事な革新は、彼らの地位がもっぱら一族に属するものとして世襲されてきたこれまでの高位の人に代わって、直接天皇に所属する役人が任命され、4 年ごとに配置換えされた。そのため権力を持ちすぎることはなくなった。3 つの最も高い政府の役職が作られた。内政担当の大臣後の太政大臣と右大臣・左大臣で、彼らは天皇にもっとも近い助言者だった。後になるとさらに、大臣とともに参事官を構成する 3 つの位、つまり納言が置かれた。本来の統治業務を処理するために、8 つの部局つまり省が設けられた。すべての地方は天皇の所有となり、その住民は天皇の臣下とされた。地方は新たに国民の人数によって分けられ、それぞれの地方の所有者は天皇の定めた税を納めねばならず、天皇への奉仕が義務付けられた。支配がうまく行くように地方は道路を作り、町と村に早馬を置いた。

入鹿が死んだ時は皇極天皇の代だったが、この女帝はそのすぐ後に弟に位を譲り、孝徳天皇が 645 年から 654 年まで統治した。帝は反乱の首謀者であり、もともと大化改新の創始者である中大兄王子の統治への大幅な関与を認めた。孝徳天皇が死ぬと姉の皇極帝が、斎明天皇（655 - 661 年）の名で 2 度目の皇位に付いた。この年にアイヌの蜂起が起きた。朝鮮ではまた日本の無理強いによって戦争が起きたが、日本軍は朝鮮人の応援に来た中国軍に敗れた。朝鮮での日本の支配はこれで終わることになった（668 年）。

日本人の楽しみと祭り（1）

ほとんどの読者にとって、日本人の楽しみと祭りの日々についてやや詳しく知ることは興味があることだろう。丁度最近何度も、収容所からさまざまな祭りの日の間の生活と振舞いを観察する機会があったからである。花見についてはもうこの新聞の第2号でいくらか説明した。ここではさらに、日本におけるほかのお祭りとお祭りの日の習慣について少し詳しく取り上げて見たい。

中国においてと同じく日本でも主たるお祭りは、人々が3日間祝う新年の祭りつまりお正月である。それは宗教的な性格の祭りである。家々はこの祭りのために、長寿と幸せな夫婦関係の象徴とみなされる松の枝と青竹を飾る。祭りの前の晩に日本人は、夜明けまで火を焚いているお寺に出かけて行く。参拝者はお祈りをしてから持ってきた火縄にこの火を移し、それで自宅のかまどの炭に火をつける。この火を1年じゅう絶やさないようにすると、その家は火の危険から守られると信じられている。日本人は眠らずにきれいに身を清め晴れやかに着飾って、登ってくる初日の出におじぎをして天地の神々に感謝し先祖に敬意を示す。

参拝者は、そこで初めて家の人々や友人の方を向き千歳の幸せを願う。日本人にとってお正月の特別料理はお餅、つまり砂糖を加えない米で作った一種のクッキーで（その準備である「餅つき」は、もう路上でしょっちゅう見ることができる）、スパイスを混ぜた甘い米ワインであるお屠蘇を飲む。

お正月の三が日には、すべての日本人は楽しみまくる。店は閉められ、すべての仕事は「三が日」が済むまで引き延ばされる。1873年まで使われていた旧暦（その後新暦が導入された）によると、お正月は物が育つ時期である2月の中旬に当たる。1月1日になってから、お正月のたくさんのもとの魅力が失われた。このまだ寒い時期では、日本人がとても愛しているような解放された仕方では野外を動き回ることができないからである。

戦闘日誌（４）

- 9月27日 李村の水道が爆破された。張村河までの李村線全体で戦闘があった。「ヤーグアル」と「カイゼリン・エリーザベト」が、効果的に側面攻撃をしてくれた。日本軍は大きな損失を蒙った。
- 9月28日 「アドラーネスト（鷲の巣）」が落ちた。口子とヴァルデルゼー高地で激しい戦闘（フリース少尉、コッホ一等砲兵、ゴットハルト二等砲兵戦死）。全軍、主要障壁の後ろに退却。今日までの6日間のわれわれの損失は、「周防」「丹後」「石見」の海からの30.5cm 砲の攻撃によるもので総員107名であり、「トライアンフ」（英国戦艦）は25.4cm 砲で加勢した。「コルモラン」「ルックス」「イルティス」は自沈した。わが方の砲台による前方地域の砲撃が始まった。
- 9月29日 日本軍の飛行機、司令部と電気施設と屠殺場を攻撃。
- 10月2日 クーロ中佐指揮下の海軍東アジア分遣隊四房山に出撃。夜10時に帰還。わが方の死傷者、大尉フォン・ヘルツベルク伯爵外28名。
- 10月3日 日本軍、済南府への鉄道を占拠。
- 10月4日 スーファン 四方から砲撃。バラック宿営所焼失。
- 10月5日 わが方繫留気球から攻撃。
- 10月9日 日本軍、孤山と大山と第1歩兵保塁の向かい側の高台に塹壕を構築。
- 10月12日 日本側の申し出で、死者の埋葬のため午前0時40分から午後4時20分まで停戦が成立。
- 10月13日 10時に西呉家村で軍使（フォン・カイザー少佐）が協議し、青島からの最後の避難民移送について取り決めた。
- 10月14日 会前岬砲台とイルティス山砲台が、激しい砲撃を受けた（会

前岬砲台には30.7cm砲弾51発が命中)。会前岬砲台は、「トリアumpf」に最初の砲撃で24cm砲弾を命中させ、戦闘不能にした。汽船「ドゥーレンダルト」と「エレン・リックメールス」は大港で自沈した。後者は、爆破の際に火災を起こし燃え尽きてしまった。

われわれの公演の夕べ

本収容所のとてもたくさんのものと同様に、われわれの公演の夕べもささやかに始まったが本当に喜ばしい成果をあげるまでに発展した。昨夜の出し物は少なかったが、それらが初めてきれいな丁度良い大きさの新しい舞台で行われたことで、さらなる一步の前進を記した。

この舞台は本当の傑作で、ごくお粗末な材料で作られなければならないかっただけにいつそう高く評価されなければならない。趣味のよい飾りつけ、舞台空間の広さ、幕のすばらしい機能、(経験からすると極めて大事だが難しいことでもあるのだが)とてもうまく解決された照明の問題。すべてが最高の賞賛に値するものだった！もちろん舞台はすっかりできあがったわけではなかったが、時間の短さからすれば無理もないことだった。次の夕べをいつそう緊張して待ち受けることになるだろうし、それまでには幕も前景も芸術的な趣味を見せてくれることだろう。

立派な舞台ができたのだから、今必要なのはそれを十分に活用すること、そしてこれが大事なのだがそれにふさわしい仕方を利用することである。

このような点で、われわれの目標をできるだけ高く掲げるのは何も恥づかしいことではない。何よりも公演の夕べをドイツ人らしさの涵養^{かんよう}に役立て、われわれの舞台から戦争がドイツ国民に目覚めさせ、今もわれわれの身近にある無数の詩・歌・物語の中に表れている、例え弱くてもたくまし

く立ち上がった声の反映を伝えるように試みることなのだ。

もちろんこれは、ユーモアなどが権利として持っているものを排除するものではない。逆に、極めて困難で深刻な時代にこそ、力強く健全なユーモアを見捨てないのがドイツ人らしさなのである。

けれどユーモアと冗談の間には大きな相違がある。昨晚上演された作品にはたくさんの罪のない冗談が含まれていた。とても感じよくスマートに演じられていたので大喝采だった。しかしわれわれの意見では、平時の皇帝誕生祭で毎年行われる喜劇はこんな深刻な時代にはふさわしくない。もちろんできれば将来は、いつも何かもっと適切な楽しいものがこうしたお祝い劇として上演されるとよいのだが。

あえてより大きな課題に取り組むことができるのは、共演者の何人かがあらわにしてくれた演劇上の才能による。聞くところによるとこれからの夕べの一つで、もう Th. ケルナーのある作品の上演が予定されているそうである。大きな成果を期待したい。

中心のプログラムはりっぱだった。詩はとても適切に選ばれており、朗読も優れていた。ことに「兄弟の挨拶」は、われわれと同じくドイツの故郷から離れているあるドイツ人が作ったものだけに、印象深かったしわれわれの気持ちにぴったりだった。

ほかの詩についてももっといろいろよい点をあげたいが、これ以上立ち入るのは行きすぎだろう。さらに考えてみたいのはこのプログラムが、これからもできるだけわれわれの講演の夕べの大きなスペースを占めてほしい、ユーモアのあのすばらしい試みの表れであるからである。とりわけ「ヒネンボルク」という詩の朗読には、メクレンブルク方言に特徴的な乾いた調子が良く出ていたように思う。

それと音楽部門である。それについては誉めるしかないが、ことにコーラスは本当に上演のたびによくなっている。

オーケストラはまたもわれわれにいくつかの行進曲と舞曲を聴かせてくれたが、しかも初登場のわれわれのベースと一緒にである。大変な苦勞

をしてナースト二等兵曹が、わずかの間に合奏できるまでにこの楽器をこなしてくれたのである。見かけどおりの大きなベースを弾くのは、見かけほど簡単なことではまったくないのでいっそう評価したい。ましてナーストこれまで弦楽器を弾いたことがないというのだから。

ことに嬉しかったのは、9人以上もの日本の将校と通訳の方々が公演に出席してくれたことである。できることならこの人たちに、いつもこの催しに来てほしいものだ。

今日のコンサートのプログラム！

第1部

1. 弦楽四重奏曲（作品 158） モーツァルト
 - a) アレグロ
 - b) アンダンテ・ウンポコ・アレグレット
 - c) テンポ・ディ・メヌエット
2. 弦楽四重奏曲第3番からメヌエット（作品 44）メンデルスゾーン

第2部

3. バリトンのためのハルンの息子たちのバラード ウムラウト
独唱 ヴェルナー副曹長
4. オペラ『ファウスト』からファンタジー グノー

第3部

5. ラデツキー行進曲 ヨハン・シュトラウス
6. バリトンのための2つの歌 オーケストラ伴奏
 - a) 反逆の歌（ノルウェー民謡）
 - b) おおヴェルメランドよ（スウェーデン民謡）
独唱 ミレンツ予備役一等砲兵

7. 来たれ夢の国へ レオ・フリートマン
8. オペレッタ『映画の女王ジルベルト』から
- a) 愛らしい小さな女の子よ
- b) 夜に
9. ホーエンフリードベルガー行進曲 フリードリッヒ 2 世

われわれの音楽の夕べ

二曲目では別のペアだけが現れ、まず二つのヴァイオリンが挨拶しチェロとヴィオラが答える。ちょっと挨拶を交わしてから全員が美しい舞曲に加わり、それぞれがそれぞれに独特のモチーフを奏するが好ましいメロディーを損なうことはない。メヌエット全体がこのような仕方で並べられ

るが重苦しくはない。けれども以前は長いことこのような説明はまるで好まれず、もともとたいていは音を軽妙で楽しいものにするには固すぎる足かせだった。そしてにもかかわらずこのような意味で何かを書いてきたのは、それをまったく微かなヒントとして捉えたかったからだけであり、つまり音を美しい和音や多かれ少なかれたやすく聴き取れるメロディーとしてばかりでなく、何らかの思想や理念の表われとして聴こうとするからである。ところで、作曲家が表現したがっている理念を探りじっくり考えてみることは音楽を聴く歓びそのものである。もちろん好んで説明されるのは歌の曲だけである。古い歌を聴くと人々は音楽のうちに、しばしば歌の言葉に含まれているストーリーの表れを見る思いがしよう。けれども作曲家は時が立つにつれ、ますます内面的なもの・魂のときめき・歓び・悲しみ・勇気・好意などさまざまな人間の心の動きのすべてを音で表現するようになる。したがって、あれこれの拍子と和音やあれこれのメロディーが何を言おうとしているのかをもはや簡単には口にできなくなる。むしろ思いをそそられ興奮させられ夢中になり悲しくなったりするが、けっして無関心ではいられない。というのもある心が語ると、すべての心は自分の感覚で答えようとするからである。言葉によって音を認識し捉えるための確かな基準が与えられている歌に当てはまることは、純器楽作品についてはより高い程度で当てはまるのである。けれども聴く気のある人ははるかに豊かな報いを得られる。今夜もそうである。

さもないければ、メンデルスゾーンのメヌエットとファウストの音楽が取り上げられるわけがない。歌についてもう少しコメントしておこう。二つの小品はわれわれの北の隣人からの民謡で、ノルウェーの「反逆の歌」とスウェーデン民謡の「おおヴェルメラントよ」である。かなり柔らかな歌謡音楽なので、スウェーデン人はよくイタリアの歌と比較してきた。これら二つの歌もスウェーデンのはよりやさしく感覚的だが、一方はより深みがあり個性的である。

C. F. マイヤーの物語詩「ハルンの息子たち」はウムラウフトの作曲

だが、原典の特徴を完全に捉えたすばらしい作品である。単純で判りやすい手段だけを使って、ウムラウトはハルンの2人の年配の息子の計画や生き方さえをも、したがって2人の表に現れた考え方のために起こった皮相な出来事を判りやすく解き明かす。

終わりになってやっと若者の感情のこもった告白を描くことで、彼が生涯の幸せを犠牲にする気になった愛ときちんと向き合うことになるのである。

収容所訪問

1915年4月30日(金)に、日本戦争俘虜援助委員会会長のドレンクハーン氏がわれわれの収容所を訪れた。この人のわれわれの居住施設と情報についての細かな視察を可能にしたのは、収容所長の多大な好意だった。ドレンクハーン氏が断言するところでは、われわれの収容所はあらゆる点で良好で、松江中佐とそのスタッフのお陰でおそらくどこよりも整っている。ドレンクハーン氏はここでは収容所住人間の折り合いがとてもよく、他の収容所でのように罰を加える必要もないと聞いて大喜びした。われわれもそれを喜びたいし、さらにドイツの母の息子として、また戦友として、いろいろと制約のある状況にもかかわらず、たがいに助け合って時を過ごし楽に乗り切れるよう心がけたい。聞くところではこのような意味で、さらに速記・地理・歴史そしておそらくは簿記のコースも設けられるそうである。

その上ドレンクハーン氏は、われわれの願いを満たそうと次のことを約束してくれた。

- 1) 体操器具(鉄棒と平行棒)
- 2) サッカーとファウストバルの球

- 3) いまでもひどく迷惑をかけている練習をそこに移せるような音楽用のバラック。できるならいくつかの楽器。
- 4) いろいろな物を洗うのに十分な石鹸
- 5) 各自に下着。そのほかそれぞれに日本政府から一袋のカーキ色の衣服がもらえるそうである。さらにわずかだがお金も支給されるという。

もともとそれぞれに毎月わずかだが給与を支給し、その上さらに別の負担の軽減を与えてくれる処置はどこからやってくるのだろうか？

- 1) 一度限りのドイツからの献金 I：クルップ社、海軍協会、アジア企業連合が積み立てた 75,100 マルクと、ある匿名の人の 30,000 マルクとある人の 1,100 マルク
- 2) ドイツからの献金 II：ベルリンのジーマンス・シュケルト社が毎月 12,000 マルクを集めている。
- 3) 在日居留ドイツ人からの献金：毎月約 2,000 ～ 3,000 マルク
- 4) ミュンヘン市からの献金

ここで、祖国を持つとはどういうことかを自覚させられないだろうか？戦争によって膨大な負担を負わされているにもかかわらず、ドイツはみずからの子弟のただ一人をも忘れずできるかぎり彼らの状況を良くしようとするのである。本当にその国民でありドイツ人であることを誇りにしたい。献金に関しては祖国に感謝したい。われわれがしなければならない課題をいつも忘れないことでそうできるのだ。ドイツ人そのもの以上にわれわれに分かち与えてくれているのだ。ドイツで一般に行われている以上に。そのことを考える必要がある。ドイツ人が未開人でも野蛮人でもなく、温和で礼儀正しくまっとうな人間であることを示そうではないか。それがわれわれの届けることのできる感謝なのだ。

その上もしもわれわれの詩人が、素敵な言葉で献金への感謝の挨拶を贈ってくれたらすばらしいのだが。

編集局は喜んで伝言を引き受けよう。

ドレンクハーン氏は、みなさんによりしく伝えてくれるよう言っていた。

チェス・コーナー

トーナメント

この編集が済んだときには、チェス・トーナメントはまだ終わっていなかった。その詳しい報告は次回の宿題にさせていただきたい。賞品の授与は毎月8日（日）の晩の予定である。

第5問の解答

（駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、S = ナイト、
T = ルーク、B = ポーン）

A. 1. Te2 - e1 (Kd1 - e2 および Te1 - d1 で詰みを狙う)

..... Th6 - a6

2. Se5 - c6 + D か T x c6

3. d5 x c6 詰み

B. 1. Da8 - g8

2. Sc5 - e6+ D か T x e6

3. d5 x e6 詰み（きわめて美しい解答である）

正解者 ドーベ予備役海軍一等砲兵

J. ヴェーバ二等砲兵

第6問（アラブ人スタンマの著作（1737年）から）

白：Kh3, Tg4, Le5, Sd8, Bg2

黒：Kh5, De1, Tc1, Sf5, Bg6, h7

3手詰め

死 亡

収容所当局から今週起こった悲報が伝えられた。仲間の2人、つまり静岡のグスターフ・マタイスと熊本のシリング海軍予備役一等砲兵が、病気のため亡くなったとのことである。

予 告

速記講習会（ガーベルスベルガー式）を開きます。参加希望者は私までご連絡下さい。

ボイトナー海軍少尉

われわれの死者たち

棺もなく、白布にも覆われず
英雄は敵地で
死をもたらす弾丸で撃ち殺され
戦友の手で葬られた

彼らに粗土がかけられるが
しかしどこで彼らの肢体が色あせようと
甘く安らぎの眠りにについている
彼らにとって土は軽いから

一つの木の十字架が墓の上で揺れている
チョークの文字だけが書かれているが
やがて雨がそれを洗い流す
そうすればそこは名前もなくなる

けれども国民全体の感謝が
どの丘にもその名が無い彼らのために
野外に眠っているそれぞれのために
目に見えないモニュメントを打ち立てる

そしてピラミッドはそびえていないが
王の墓ほど天に向かってはいないが
ドイツの魂のすべてが嘆き悲しむ
くず折れたそれぞれの男のために

そしてドイツが表すこの感謝は
永遠に留まり続ける
たとえ時間がなりをひそめても
どんな嵐もそれを吹き消すことはできない
マクス・グルーベ¹

1 第3海兵大隊第4中隊所属の捕虜、熊本、後に久留米に収容されていた。



フォイダール・テニス・クラブ

人間は空気だけで生きているわけではない。食事もしなければならない。そして食事は、何通りもある胃に合うように作られなければならない。われわれはずっと前に大阪にいたときからこのことを学んだ。そこでは何もおかしいことがなかったからである。他の食事でもそうだが、なんとも玉ねぎのスープにはうんざりだ。みんなはそれを誉めていたが！

例えば日曜などそこで自分で調理するときには、ゲーラッシュや別のすばらしいものを作った。そこまでいけたら、邪魔が入らないときにはえんどう豆やひら豆やいんげん豆で満足した。こってりしておいしくて本物のスープなど、たいていは家では食べられないからだ。料理人をよく見ていると、みんなを満足させようと懸命に努力している。それなのに彼らにその報酬は何もない。彼らは自分のわずかのものをも犠牲にしているのに、肉が柔らかくないと小言を食らう。彼らは焼き、ゆで、炒め、そして懸命に悩んでいる。私はずっと前から、きっと誰もが満足していると考えている。分別のある人は何かをもらうと感謝するのだ。



うるさい奴はどこにでもいる。友よ、勇気を持って調理してくれ。そしてあなた方に何もあげることができないが、あなた方が努力家で勤勉であることに気づき、誉めたたえることだろう。というのもどんな人にもきちんと対応するというのは、誰にでもすることのできない技術だからだ。



国際ファウストバル競技会

ファウストバルの競技中はそれに集中し、
ほとんど冷静にしていることが大事だ。
なぜなら目がくらむほど熱中するのは害になるだけで、
競技にとってプラスにならないからだ。
イギリス人がその例である。
競技中にはどうしたらよいのだろう！
フランス人は勢いよく跳び上がり、
格好よくひっくり返る！
額から汗がなまぬるく滴り落ちる。

おおこわ、これ以上続いたら、
彼はブーツがなければもう我慢できない。
ロシア人は気の短い男で、
腰までもある防水長靴でやって来たが、
それが走る邪魔になり、
そのためやがて本当のバカのように見える。
小さなセルビア人が周りを回っている。
彼にはこの競技がおよそくだらなく思えたのだ。
彼は何度も飛び上がったので疲れてしまい、
もうボールを処理することができなかった。
愚かなモンテネグロ人は離れて立っている。
彼はひどい様子を喜んでいる。
けれども彼は呼吸困難を患っているので、
競技中にまもなく死ぬだろう。
十分な精神と力を持っている敵は
この競技をきちんと理解しており、
事態が変わっても
結局はまた勝者になるだろう。

スコットランドでは、風見鶏がスパイとして逮捕された。それがドイツ人に最新の風向きを教えていたというのだ。

ロンドンではいびきが禁じられた。臆病な連中がそれを聞いて、ツェッペリンのプロペラのうなりを思い出すからだ。